

小川博久・岩田遵子・本庄富美子著

## 『授業実践の限界を超えて —ある教師の表現者としての教育実践』

(ななみ書房、2018年)

鶴田真紀

「優れた」実践とは何か。また、「優れた」教師とは何か。われわれの大半は、学校教育を「知っている」。必ずしも研究者として知っているのではなく、かつての児童または生徒として、学校教育を経験した者として知っている。しかしながらその一方で、何が「優れた実践」であって、何が「優れた教師」なのかを明示的に答ようとする、その答えには緩やかなコンセンサスが成立しているように思われるものの、実は大きな振幅があるように思われる。同様に、研究レベルにおいても、教育実践の「質」およびその保証や向上が、幼児教育から高等教育にわたる広範な段階で議論される一方で、質を向上させたり保証したりする方法を問う以前に、そもそも「質」とはいかなる事柄を指示するのかということ自体が、議論の対象でもある。本書は、「優れた」実践とは、「優れた」教師とは、あるいは実践の「質」とは何かといった問いに対してわれわれの思考を触発し、それらの問いに対する回答を言語化していくための材料を提供してくれる。

本書は、元小学校教諭である本庄富美子氏（以下、「本庄教諭」とする）の教育実践を10年間にわたって観察したエスノグラフィ研究である。本庄教諭の教育実践については、本書の著者でもある小川博久と岩田遵子によってすでに『子どもの「居場所」を求めて—子ども集団の連帯性と規範形成』（ななみ書房、2009年）が出版されているが、本書は本庄教諭の教育実践に対しあえて教師の個性の側から踏み込んで検討するという試みである。というのも、本庄教諭の教育実践としての特性は、実践の個性的側面を言語的に明確化することによって、新たな教育実践として他者に多くの示唆になりうると考えられる

からである (p.1)。たしかに本庄教諭の実践は、一見、「職人技」であり、本庄教諭だからこそ可能となっている実践のように思える。しかしながら、本書は、その実践を教育学・教育方法学の視点から考察することによって、(語弊はあるだろうがいわゆる)「名物教師」による単なる実践記録ではなく、学術的価値を有し、われわれに近代学校教育制度そのものを再検討するよう迫るのである。以下、本書における中心的な事例について言及していくことにしたい。

第1章では、「子ども一人ひとりが生きる学級経営-障碍児が健常児と共に」として、第1節では、体育の授業に参加せず教室で過ごすことになった4名の女子児童間のやりとりが焦点をあてられる。そのうちの1人である「統合失調症のH子」に対して、3名の女子児童たちが「ケアする者」と「ケアされる者」という主従関係に陥らずに、H子の自由を尊重し、気遣いながらも、ともに活動を楽しむ友人としての関係を構築しているあり様が分析される。第2節では、長縄跳びにおいて、集団活動のリズムを壊すとされがちな「障碍児S子」の運動能力を助成することで、集団活動に参入させ、活動の楽しさを高める要因としていくという、「インクルーシブな実践」が、子どもたちの主体的意思によって展開されるあり様が分析される。障害のある子どもをめぐる相互行為に関心を有する評者にとって、H子やS子をめぐる児童たちのやりとりは実に興味深く、さらなる問いが喚起されていく(たとえば、H子の事例である。この事例は6月末の出来事であるが、その前年度まで「問題児」としてクラスから排斥されてたH子に対して、本庄教諭が担任となって以降、女子児童たちの「ケアの精神とその態度」(p.42)は、どのように育まれていったのか。「本庄教諭の努力」(p.42)に対して、クラス内での戸惑いや葛藤を経てどのように関係性が変容していったのだろうか。このように、本章の範疇を超えた問いが次々と喚起されていく)。だが、待てよ。そもそも本書の関心は主題にもある通り「授業実践」のほずである。そうであるにもかかわらず、第1章第1節でまず取り上げられるのは、「授業場面」でもなければ、そもそも本庄教諭が介在しているわけでもない場面である。ここでの関心の焦点は教師ではなくむしろ「子ども」の活動に向けられる。だが、それこそが「弱者に対してどれだけ共感できるかが、人間としての価値に関わるという本庄教諭の精神を、クラスの皆が共有していくこと具体的な場面」(p.43)として、さらにいえば、「学

級活動を教育実践の基盤にする」(p.16) という本庄教諭の実践の特色もまた示唆されているのである。授業実践(の研究)は制度的な意味での「授業」に限定されるわけではないのである。また、本章において筆者が関心をもったのは「ノリ」という言葉である(第2節)。「ノリ」とはあくまでも即時的にその場でクラス集団の協働性に基づいて生成される同調性を伴うリズム・同調的な活動であり、ノリを高める活動が繰り返されることで、「クラスとしての一体感と共に、子ども同士の相互関係性も高まっていく」(p.17)。同調的活動としての集団的なノリの表現は、本庄教諭の日々の実践の蓄積とそれに伴う子どもたちの経験と応答の蓄積と共鳴しあっている。この「ノリ」とは、本書全体を通じて、本庄教諭の実践を象徴的に示すキーワードでもある。

第2章では、本庄教諭の演劇的表現活動の事例として、4年生の国語の授業において集団劇を発表するためのリハーサル場面(第2節・第3節)、6年生における古典劇朗読のリハーサル場面(第4節)が検討される。いずれも子どもたちは意欲的に取り組み、物語世界のイメージが希薄だった子どもたちも、演技という身体的パフォーマンスを通じて次第に物語を実感的に理解していく過程が描かれる。その過程を通して「情動の場」が形成され、ノリの共有度が深まれば深まるほど、子どもたちは意欲的に発言や演技を行い、発言内容や演技の質を高めていく(第2節・第3節)。同時に、子どもたち自身の行為や演じる作品を反省的に捉える視点を獲得する可能性を有していく。そこでは、子どもたちは、パフォーマンスの変容を通して、教科の学習の面でも一定の能力を習得していくことが示唆される(第4節)。その基底には、物語や古典と等の教材を理解するとはいかなることであるのかというような、「学力」そのものに対する捉え直しが存在する。子どもたちのノリの共有と変容が示されるスリリングな過程を、読み手は、授業場面の録画をもとに詳細に再現した「事例」を「追体験」することを通して経験することになる。そして、ぜひ読み手は、「集団的知性」とも称されるような、本章において子どもたちが「獲得しているもの」を共に考察してほしいと思う。

第3章では、4年生の音楽の授業で合奏の練習場面が取り上げられる(第2節)。自由練習(であるにも関わらず)自発的に全員での合奏を始め、子どもが一斉活動を主導し、誰一人として例外的な行動をとることなく、クラス全体

が「ノリの共有度が高いバンドのような学級集団になっている」(p.189)姿が示される。個人の関心や表現は、クラスにおいて共有されるノリの中にある。第4章では、1年生の国語の授業で、担任教師が本庄教諭に補助者として参加することを希望して行われた授業場面である(第1節)。本章に限らずこれまでの事例とも共有する点として、本庄教諭の授業は、子どもたちの身体が互いに「観る<sup>2</sup>観られる」という関係において、相互にノリを生みだしながらノリを共有しつつ展開されることが特質といえる(p.213)。

近代学校教育制度は、著者が指摘するように、教師と子ども、子ども同士のノリの共有を、制度的には剥奪してきたのである。そうであるにも関わらず、本庄教諭の実践では、近代学校教育制度の内にありながら、学級という学習集団がノリの共有によって結びつき、それによって子どもたちの興味・関心・意欲が共有され、相互的な学びが展開されているのである。このことはまた、本庄教諭自身が「私の目指した子ども主体の授業は、幼児教育における子どもの遊びを通した学びの在り方を小学校教育につなぐことで可能となったといえる」(p.327)と述べているように、幼児教育と学校教育との断絶の中で、「本庄実践は究極のところ近代学校システムの問題性をわれわれに問うている」(p.353)のである。近代学校教育制度は、学校的価値観と学校的身体を有した「児童」を作り出した。本書自体が、本庄教諭の教育実践を介した実践の側からの近代学校教育制度批判であり、その捉え直しと再構築の実践なのである。

ここでは本書で言及されている本庄教諭のパフォーマンス全てに言及することは、断念せざるをえない。それは、単に紙幅の都合というよりは、本庄教諭の実践が細部に至るまであまりにも興味深いゆえである。そして、そのような実践の細部にこだわりつつ、読み手の思考を刺激する。本書は価値あるエスノグラフィ研究であると同時に、臨床的研究のあり方に一石を投じるものとなっている。本書は、冒頭で述べたとおり10年間という長期にわたって1人の教師の実践を探究してきた。その過程では、当然のことながら、研究者にとって「フィールド」とは何か、「臨床」研究はどうあるべきかといった問い(第5章)に直面せざるをえない。本書は、著者3名の明確な役割分担のもと執筆され、特に本庄教諭自身が自らの実践事例についての語りを加えることで、事例に対する多角的な検討も可能となっている。フィールドワークの過程で、また本書

の執筆過程で、著者らの間に育まれた協働性によって、理論と実践の往還が幾たびもなされ、そのことが本庄教諭の実践の魅力を引き出すと同時に本書の学術的価値を高めている。

本庄教諭はすでに定年退職を迎えられたが、その後も非常勤教諭として現職教諭のアドバイザーを担い、かつ現職時代より主催してきた校内研究会を通じて、退職後も学級経営や授業実践についての指導や助言を行ってきた。本書には、研究会の様子も掲載されている。それを読むといかに本庄教諭が教師各々の自主性を尊重しつつ、(本庄教諭が授業に介入する際には) 自分にいかなる援助ができるのかということに心を砕いていたことが伺える(本庄教諭に、研究者としてでも、同僚としてでもなく、小学生時代の自分の「担任の先生」として出会い授業を受けてみたかった、と評者は素朴にも思ってしまう)。本庄教諭の実践は、研究者のみでなく、現在の学校教育に関心をもつ全ての人にとって、そのあり方を再考させるものとなっている。とすれば、本書のあえての課題は、「こうした実践の意義を本庄教諭の個性的力量とすることを超えて、一般化する必要がある」(p.135)ということである。もちろん、「一般化」として何を目指すのかは検討する必要があるが、本庄教諭の実践を稀有な教師の一事例として終わらせないということにあるのだろう。それはそのまま本書の意義をどのように広めていくのかということでもある。